

# 『筋ぐ』

発行 教育相談室「あした塾」 発行責任者 滝井元之  
 連絡先 927-0014 石川県鳳珠郡穴水町梶原の197  
 電話 0768-56-1152 (自宅 0768-56-1151)

## 穴水町の復興に向かう

神戸大空襲後の大空襲復興は阪神淡路大震災30年のシンボルジムで語られたところからいくつか取り上げます。

「復興の目標は何か、課題は何



か」という語の中で、まずは「安全な町づくりをすることである」とし、課題は多くあります。周辺を切り替える行政を改めていく、「災害は社会の過ちを表に表していくから改革を進めていかなければいけない」と語っています。

そして、「被災地と被災者が自立をする」ことを自指でなければならぬ、人間が希望を持ついけるように…と語っています。それ上で、どうしてひくだけにばかり注目されるが、水や能動的すばらしいところ、地域の光の部分を見つけて両方の議論(光と影)をしあげればいいとも語っています。



## 心を受け止めて!!

「時々1月1日の地震で家が倒壊した。1階の店は2階が落ちたことで、つぶされ、何も持ち出せなかつた。生業を失くし、これまでの生計はどうしたものか。何も気が付かぬまゝ、天気が悪いとお気持ちが落ちこむ…。」仮設を始めた中で聴いた話です。ボランティア立場では、このお話を聞いては聞くしかありません。でも、行政はなんとか支援を考えてください。相談にのってください。支援金を例に出してください。

い、「生きている」ということは、そこ「命がある」ということではありません。「生きがあり」「張り合ひ・刈り合ひ・生きがいがあり」「元気で過ごせる」ということです。そして、死ぬことがあり、「他がりが必要とされている」ということです。住民・被災者に寄り添う行政であつてほしいと思います。"生きている。ではなく文字通り"書りそりです。(T)

(筋ぐ、第89号は4月1日付で発行予定です)

相談・情報は教育相談室「あした塾」までお寄せください。(電話等は隣隣下にあります。)

映画

# 七人侍

監督 黒澤明

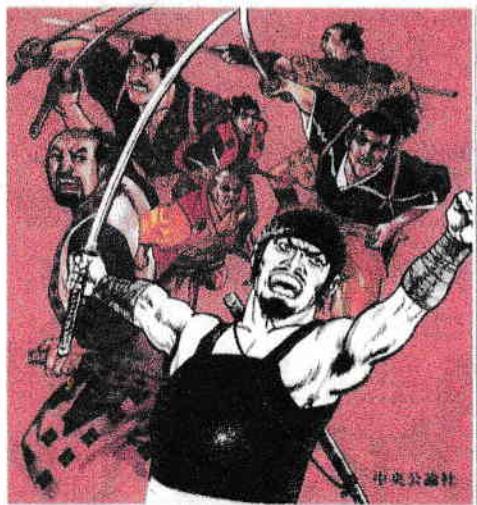
30年前の阪神淡路大震災ボランティア元年と言ふべき。その後の災害ボランティア

を継がれてきています。このボランティアに関し興味深い話を紹介します。

今から47年前の昭和29年(1954年)に日本が世界に誇る映画監督黒澤明が「七人侍」という映画を世に出しています。戦国時代、戦乱の中で野武士が登場するところなり。その野武士たちはギリギリの中で生きている農民の集団を襲います。農民は自分たちの集団を守るために「侍」を雇うことになります。これが農民の求めに応じて「七人」はまさに究極のボランティアとも言えます。命懸けて戦い、死ぬが命を落とします。



(1954年さいとうたけお監督「七人の侍」より引用)



## 七人侍の内容

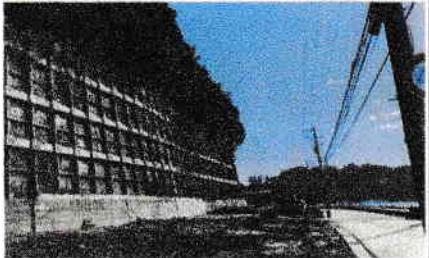
「七人侍」は全くの無報酬で農民たちが戦うのです。自分たちだけで戦うのではなくのです。農民を組織し、侍と農民が一緒に戦うのです。ここには大きな教訓です。

孫、方上の姫にあります。黒澤監督は、侍大将の島田勘次衛門「他人を守つこそ自分を守る! おのれの事はばかり考える奴は おのれを守ります奴だ!!」といふセリフを言わせています。

つまり、黒澤監督は只者ではなかったのです。

## 求められる二つのやうの

あの地震から1年2ヶ月。果たして来られた人は復興がほとんど進んでいないと見えるだけです。複雑ですがこれが現象です。私自身、他人が自立できるように少しでもお手伝い一步歩を進めるしか利せん。これがボランティアは元自立支援する(後押す)もでれでれはお手伝いと想いがけます。「お手伝い支援」から「引き出支援」へ。支援物資も必要、情報も必要、イベントも必要。でも自立後押しの支援がもっと必要です。



(解体された古い住宅街)

七人の侍 主演は三船敏郎 志村喬。

一九六〇年舞台劇「荒野の七人」としてリメイクされています。